

新年のご挨拶

一般社団法人日本病院薬剤師会
会長

木平 健治 Kenji KIHIRA



新年明けましておめでとうございます。会員の皆様方におかれましては、心新たに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。また、日頃より日本病院薬剤師会（以下、日病薬）の運営にご理解とご協力を賜り、深謝申し上げます。特に、昨年「第1回日本病院薬剤師会Future Pharmacist Forum」の開催にあたっては、多くの皆様のご支援とご協力により、成功裏に開催できたことに改めて感謝申し上げます。

昨年は様々な災害が発生し、さながら日本が災害列島に様変わりしたかのような一年でした。被災者の皆様には心よりお見舞い申し上げたいと思います。日病薬としても、あらためて災害対策のあり方について検討の必要性を痛感しているところです。

一方、明るい話題として、発売以来色々と話題となった免疫チェックポイント阻害薬の開発で、本庶佑先生がノーベル医学生理学賞を受賞されました。薬物療法にかかわる薬剤師として、心からお祝いを申し上げます。

昨年度は、診療報酬が改定され、薬剤耐性（antimicrobial resistance：AMR）対策の一環として抗菌薬適正使用推進チーム（antimicrobial stewardship team：AST）活動など、病院薬剤師に対し高い評価がされました。また、薬剤師の関与した医療連携に対する項目も高く評価されています。このことは、地域医療計画に従って医療改革を推進し、少子高齢化、医療機能の再編成、医療保険制度の維持を目指し、医療機能の分化と地域包括ケアシステムの構築のため、薬剤師－薬剤師間はもとより他職種と「医療連携」を一層推進することが、我々薬剤師に課された最も大きな課題だと思っております。

本年度は、今回の診療報酬に向けて、皆様からご要望を受け検討する年となりますが、引き続き新たなエビデンスの構築も合わせてお願い致します。

また、いよいよ薬学改定コアカリキュラムに対応した臨床実習の受け入れが始まります。その他、薬剤師の地域偏在の問題は継続的に取り組むべき重要課題です。

今後、電子化の時代を迎え、ビッグデータの利活用が可能となれば、医薬品の適正使用のためのデータとして副作用の予防・早期発見・対応に活かされることになり、薬の専門職としての薬剤師の力を示し、加えて、様々な場面で機械化が進み、人工知能（artificial intelligence：AI）が導入され正確性や効率性も向上すると思われそうですが、逆に人として患者と対面する機会が増えることで、薬の専門職としての薬剤師の存在感を示す絶好のチャンスとなるかもしれません。

日頃は患者の薬物療法のために淡々と業務を行っておられることと思いますが、折に触れ大きな時代の変化の波が確実に押し寄せていることも肌で感じておられることと思います。しかし、我々薬剤師の最も重要な使命は「薬物療法の有効性と安全性を確保する」ことです。そのことを、常に念頭に置き、会員の一人ひとりの皆様、都道府県病院薬剤師会、そして、日病薬が一丸となって様々な課題に対応し、次代を切り開いていきたいと思っております。

新年にあたり、会員の皆様の一層のご理解とご支援をお願い申し上げ、また、皆様のご健勝とますますのご活躍をご祈念申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。